

シニアのウエルビーイングを 高める文化芸術

—50歳以上、演劇初心者を対象のミュージカル劇団とは

インタビュー

秋山シュン太郎

「特定非営利活動法人発起塾代表／脚本・演出家」



加藤しのぶ 構成
宮村政徳 撮影

超高齢化時代に入った日本において、シニア期のウエルビーイングの向上は社会全体の課題となった。そして近年、文化芸術活動を通じた健康促進、生きがいづくり、地域交流への寄与などにも期待が高まっている。

25年以上の歴史を持つ、大阪発のシニアミュージカル劇団「発起塾」はその先進例ともいえる集団だ。「表現したい」「人生を楽しみたい」と歌やダンスに挑戦し舞台上に立つシニアたちはエネルギーにあふれている。発起塾の取り組みを通し、舞台芸術がシニアのウエルビーイング向上に果たす役割をみてみたい。

2024年8月24日、ニューヨークにあるローズ・ナイジェルバーグ劇場で、日本のミュージカル劇団による英語ミュージカル『花のクッキー売り娘』が上演された。出演者は平均年齢65歳、最高齢75歳というシニア層19名。全員が50歳を過ぎてからミュージカルの稽古を始めた、演劇初心者の集団である。ミュージカルの街ニューヨークにあってもシニアばかりのミュージカルは珍しく、エネルギーに満ちた舞台は大盛況で幕を下ろした。ニューヨークを魅了したのは、1999年創設のシニアミュージカル劇団発起塾（NPO法人発起塾）である。入塾条件は「50歳以上」であることのみ、「何もできなくていいんです！」という異色の劇団がなぜ生まれたのか。シニア層のウエル

ビーイングの向上に、演劇はどのような力を持つのか。脚本・演出家であり、発起塾代表の秋山シュン太郎さんにお話をうかがった。

何歳からがシニア？ 発起塾の誕生まで

——発起塾は、「50歳にならないと入れない」「あなたが主役」「100歳までミュージカル」というユニークな方針をお持ちです。このような劇団を立ち上げた背景や、きっかけをお聞かせください。

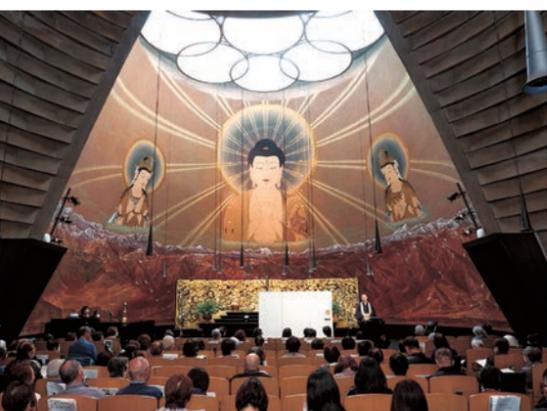
秋山 私はもともと役者でした。高校から演劇を始め、大学在学中に劇団の養成所に入り、学生のうちにプロになったんです。でも仕事があるわけではなく、大手広告代理店と組んでミステリー企画や謎解き企画などを考えたりしていました。あるとき、何かおもしろい企画を考えてと言われて出したのが、中間管理職のおじさんを集めたミュージカルです。当時、



上／2024年8月にニューヨークで行われた『花のクッキー売り娘』。下／公演後、成功を喜ぶ塾生たち。写真提供／発起塾

1980年代の終わりから1990年代初めは、いわゆるバブル期で皆が元気だった時代でしたが、上層部と部下の間に挟まれた中間管理職の人は毎日終電時間まで働いて、疲れ切っていてかわいそうと言われていたんですね。そうした中間管理職の悲哀をミュージカルにしたらおもしろいと思ったのですが、見事にボツになりました。ただ実現はしなくても「ミュージカル」は私の中で一つのキーワードになっていました。その後、1999年に大阪にある浄土宗寺院の一心寺で当時の住職と、仏教に興味のある方を対象にした「一心寺日曜学校」を立ち上げました。説法だけでなく、落語や演劇、ダンス、マジックなどのエンターテインメントもするので、月に1回、200人ほどの人を集めて行っていたのです。

あるとき、エンターテインメントの時間に皆さんにダンスをやらせようことになりました。担当の先生には「皆さんシニアですから、ダンスといっても体をほぐす程度のストレッチのよなもの、でも簡単な振り付けがある方がおもしろいだろうから、用意してくださいね」とお願いしたんです。これがものすごく受けました。若いスタッフですらヘトヘトになるくらいだったのに、70代、80代の方が最後まで踊っただけでなく、「次の曲は？」と言うんです。その後のアンケートにも「毎月ダンスをやってほしい」と書かれていて、いったいこれはどういうことかと。よく考えてみると、この方々は



秋山氏が立ち上げに携わった「一心寺日曜学校」は、大阪市天王寺区・一心寺の三千佛堂講堂にて現在も毎月第4日曜日に開催されている。写真提供／一心寺日曜学校

若い頃にダンスホールに通っていた世代なんです。さらに、その後はカラオケが大流行し中高年の方が大枚をはたいてカラオケに通っている状況もありました。そうか、この世代はもともとアクティブに過ごしてきた人で、基本的に踊りや歌を身につけた人たちなんだと気づいたんです。踊りと歌ができるなら、そこに演劇を足すとミュージカルになるんじゃないか!? そう思ってシニア向けのミュージカル劇団を立ち上げることにしました。発起塾の名称は「一念発起」からとったもので、やりたいと思ったときが始めるときだという思いをこめています。

——塾生の年齢を50歳以上としたのはなぜでしょう？
秋山 シニア向けといっても、そもそもシニアっていくつやねん、とずいぶん迷いました。当時シニアという一般的なには定年を迎えた60歳以上をさしていたんです。でも、その頃のスーパーマーケットなどのパートの応募資格は



上／2024年『タテコモリ』公演。銀行を舞台に50歳以上のシニアが歌って踊る 下／塾生募集のチラシ。「運動不足解消」「脳の活性化」「自分の才能再発見!」などの文字が躍る。写真提供／発起塾

どれも50歳まで。じゃあ、51歳から59歳の人はなんなんだ、と。シニアの枠にも入らないけれど、求人では必要とされていないと位置づけられている。自分の経験からも、この頃からいろいろな体調の変化が現れはじめて、深刻な問題はなくともどこかイライラとしたものを抱えてしまう時期なんですよ。

以前、人生三分割論という説が流行った時期があります。私が三分割するならば「学生期」「がむしゃら期」「人生やり直し期」と考えます。ならば「人生やり直し期」は50歳からだろうと。シニアの枠にも入らない空白ともいえる10年はいわば助走の時期で、新たな挑戦に突き進むことも、違うと思えば方向転換もできると考えたのです。

最終的に演劇経験のない50歳以上100歳までを条件とし、塾生募集をしました。募集記事が新聞に掲載された日、朝6時台から事務所に壊してしまおうことです。そのために保険にもきっちり入りました。それでも塾生は授業料以外、公演にかかる劇場の費用や衣装代の負担はなく、チケットノルマもなしとしました。その分、毎月の授業料を高く設定したんです。25年前、月に2回で1万円台の授業料はしぶん高額なもので、自分たちで「日本で2番目に高い授業料」と言っていたものです。ただ、25年以上経ってもほとんど値上げをしていないので、今はちょっと失敗したなと思っています(笑)。

旗揚げ公演は、設立1年後に大阪府立労働センターにあるエル・シアターで行った『荷車よ北北西に進路を取れ!』でした。終演後は拍手喝采でしたね。公演後は入塾希望者が増えました。最初はミュージカルの講座だけでスタートした発起塾ですが、今では脚本やダンス、芝居語り、合唱団など、講座がどんどん増えていま

問い合わせの電話が鳴りやまない状態でした。反響の大きさは想像以上で、結局問い合わせが150件くらい、そのうち80人ほどが実際に入塾されました。

おもしろいことに、劇団設立後さまざまな企業から「シニア」について知りたいので見学したいという申し出を受けました。介護保険制度が創設されたのが2000年で、企業としてもシニアをどう捉えるか模索していた時代だったのでしょう。募集年齢を決定した理由を話したのですが、その後、見学にこられた保険会社のシニア保険の加入年齢が60歳から50歳になったということもありました。この頃からシニアの定義が変化してきたように感じます。

「楽しい」が一番 シニアミュージカルの仕組み

設立当初から大所帯の劇団となった発起塾です

すし、「本日青春テレビ」というネット番組もやっています。拠点も大阪だけでなく京都、神戸、名古屋と広がりました。

——初めてミュージカルに挑戦するシニアの反応や、印象的なできごとはありますか？

秋山 何より、楽しいからずっと笑顔です。もちろん台詞や振りを覚えるために必死でやっているんだけど、それも楽しい。皆さん50年以上生きているから、台詞を言うだけで重みがあります。その人の経験がにじみ出ますし、訛っていてもいい。むしろそれがいい。ダンスをしても、きれいに1拍ずつほかの人とずれる人もいます。絶対に皆と合わないんだけど、その人がとてもいい笑顔なんです。それが一番です。満面の笑顔を見ると、だんだんどちらのダンスが正しいのかわからなくなるくらい。ここでは入った人がずっと楽しんでほしいと思いま

が、どのように運営されたのでしょうか。

秋山 実はシニア劇団はライフワークとしてのんびり進めるつもりだったんです。はじめは10人もくれば嬉しいなど。ところが思いがけず最初から80人も集まったので、ある程度システムを作っていくなくてはならない。でも、実際はまだ講師も決まっていなかった状態でした。お願いしたいと声をかけても、最初は皆に嫌がられましたね。初心者シニアなんて面倒くさいとか、教える自信がないとか……。

確かに、シニアの場合、まず何より物覚えの問題があります。歌もダンスも台詞もすぐに覚えられない。すると芝居の途中で止まってしまふんですね。舞台上では、この止まるというのが最悪なわけです。そうならないようにするために、公演では黒子となるスタッフを配置しようと考えました。黒子は文字通り黒い服を着た舞台上ではない設定の存在です。例えば立ち位置を間違えた人がいたら、横から黒子がその人の腕をつかんでグググッと照明の当たる位置まで引張る。台詞を忘れてしまったら黒子がプロンプター(舞台の陰にいて、出演中の俳優に台詞を教えたりする人)をする。とにかく芝居が止まらないようにちゃんとするから、絶対大丈夫だからと講師に依頼をしました。

費用面でいえば、黒子役はもちろん舞台のフロにお願ひしていますから、講師料のほか黒子の費用がかかるわけです。さらに怖いのは、骨折などのけが、よろけて劇場の付帯設備などを。とはいえ、最初に脚本を作ったときは、ここまで覚えないかと本当に困りましたが(笑)。

設立当時の塾生の最高齢は80歳の方でしたが、「50歳の人が台詞を100回繰り返して覚えるなら、私は300回繰り返さないと入らない」と言って実際に何度も繰り返しながら覚えておられた。80歳でも、そうやって真面目に取り組んだ方は本番も間違えないんです。その方は90歳まで続けられ、やめられた3カ月後に亡くなられました。他の塾生は「この方のように、元気で長く続けたい」と目標にしていますね。

印象に残っているのは、東日本大震災後の東北の仮設住宅で「東北がんばっていきまっしょい」という公演をしたときのことです。喜劇で皆が笑って終わろうというときに、観客の中に一人泣いている方がおられた。「どうかきれましたか」とお聞きしたら、「生きていたらね、こんなおもしろいのを観ることができたのに」と、大切な方であろう人を思い浮かべながらおっしゃったのを今も覚えています。

それから50歳以上という、親や伴侶などの介護は避けられません。介護のために発起塾をやめる方もいますし、なんとか続ける方もいます。介護をしながら続けている塾生の一人が、介護を終えたときに、「発起塾がなかったら介護疲れで私は絶対につぶれていた。家族の協力を満足に得られないなか本当にしんどかったけれど、家と発起塾との往復時間と授業の2時間だけは自分のことだけ考えていればいい時間



塾生たちはミュージカルの要素であるダンス、演技、歌を学び、公演のための稽古を重ねる。「公演組」「ツアー組」「英語劇クラス」などがある。写真提供／発起塾



2012年11月、宮城県石巻市や女川町の仮設住宅で行った「東北ががんばっていきましょい」公演の様子。公演後は住民たちとお茶を飲みながら語り合う時間も設けた。写真提供／発起塾



だった。これが月に2回あるだけで救われまし
たと、お礼を言われたことがあります。

こちらでも続けられる体制を整えることが必要
で、例えば授業中に携帯電話を使用するのは禁
止ということが多いですが、ここでは電源は切
らなくていいし、かかってきたら電話に出てい
いですよと言っています。介護中などという電
話がかかってくるかわかりませんから。また最
初の頃、ダンスや歌を覚えるために授業が始
まっていてもカメラを触ったり、録音したりす
る人がいて注意していたのですが、これもただ
禁止するのではなく、ダンスビデオと先生が
歌ったCDを制作して渡すことにしています。

「世の中で一番ハードルの低いミュージカル劇
団です」と笑っています。

——2024年は、ニューヨークで公演されましたね。
秋山 ニューヨーク公演は2回目です。もつと

たらもうしかたがないと。結果、出演希望者だ
けでなく、「発起塾をつぶさないでほしい」と
出演しなくても15万円払ってくださる方がたく
さんおられたんです。それに寄付金も加えて、
マイナス部分をどうにか埋められたので、なん
とか続いています。

実際にはコロナ収束後の今もお客さんの数は
なかなか戻らないですし、入塾する人も少なく
なっています。でも悲観的になっっているわけ
ではありません。というのも、もともと発起塾は
いつかつぶすために作ったところがあるからで
す。例えば、シニアの趣味の王道と言えば、園
芸、絵手紙、カメラでしたが、今はシニアがエ
ベレストに登頂したり、ドーバー海峡を泳いで
横断するなど活躍のフィールドが広がっていま
す。舞台芸術分野でも、発起塾を設立した当時、
シニアが演劇をする場はなかった。今はそうで
はありません。そういう意味で発起塾がやろう
としたことは実現できたかなと思っっています。
規模を縮小していく段階になっているのかわし
りませんが、ただし、シニアミュージカルをやっ
ているところはないんですね。今、発起塾で
はいろいろな講座が枝葉のように増えています
が、少し切り落として、幹であるミュージカル
だけ残していこうと考えています。まだ中間管
理職のおじさんミュージカルも諦めていません
しね(笑)。

——今後、何かあらたな展開は？

秋山 これまでずっとミュージカルを通して、

早くに準備をしていたのですが、コロナ禍など
で延びて2024年になりました。今回は英語
も発音から徹底的に練習して、皆「日本語でも
覚えられないのに」と言いながら必死で稽古し
ていました。ニュー Yorkerにも楽しんでもら
えたようでよかったです。ほかにもタイ、イン
ドネシア、ハワイ、スコットランドなどでも公
演しました。どれも一部現地の言語を話すよう
にしています。塾生も、まさか自分がミュージ
カルをやるだけでなく、海外で公演をするだ
なんて考えていません。それが実現しているの
ですから、おもしろいですよね。

——大阪校から始まってその後拠点を広げられてい
ますが、どのように進められましたか。

秋山 授業料はそれなりにもらっています、
ミュージカルはほかの演劇に比べて非常にお金
がかかります。だから、同じ演目で公演数を増
やすことにしたんです。大阪の公演を地方で上
演する場合、演出はその地方の演出家をするの
ですが、自分なりに工夫するのはいいけれど、
一応私の演出を模倣してほしいと言っています。
そうすると、地方の演出家にかかる費用だけみ
ておけば、音源や照明プラン、衣装も一緒にの
で、1回の単価が下げられます。

この方法のもう一つの良いところは、例えば
京都で出演予定だった人が急病などで出られな
くなったとき、同じ役をやった大阪の人が京都
公演に参加でき、公演中止にならないんです。
演出を模倣してもらっているの、別の会場で

シニアのウェルビーイングの向上に力を入れて
きました。今私は67歳ですが、65歳のときに10
年かけて何かしようと考えたんです。そこで、
これまでの「多くの人にミュージカルを楽しん
でもらう」という基本理念を守りながら、次は
若い世代がミュージカルで食べていけるような
枠組みを創造していきたいと思っています。

拠点は滋賀県長浜市です。長浜という地は歴
史があるのはもちろん、立地的に福井県や三重
県、岐阜県などを含めると人が集まるための中
心地になります。ここでミュージカルをやった
らおもしろいのではないかと。長浜市旧市街の
一角には、伝統的建造物群を生かした「黒壁ス
クエア」という観光スポットもあるので、ここ
で平日もミュージカルを楽しめるような場所が
作れたらと思っています。とはいえ、今回は若
い人たちがミュージカルで食べていけるという
のも目標の一つですから、簡単なことではあり
ません。まずは地元の方との信頼関係を築くこ
とから。これまで培ってきた経験を生かして奮
闘中です。

——最後に、舞台芸術はどのような可能性を備えて
いると思いますか。

秋山 まず、演劇をやっているとよかったと本当
に思います。演劇、舞台芸術はある種インチキ
なんですよね。現実にはありえないようなこと
も、舞台ではいろいろな手法で可能にしますか
ら。そのインチキ加減が夢をつくりだすのだ
と思います。

あっても立ち位置なども間違えませんし、本番
に出られなくて涙をのんだ人もどこかのほかの
公演に出ることができると思えば励みにもなり
ますしね。
公演をするたびにいろいろなところから「大
阪へは通えないから、うちでもやってほしい」
というお手紙をいただきました。そうして声か
かった地域に新たな拠点を設けているうちに、
今のようになりました。

インチキさが夢をつくる 演劇の可能性とウェルビーイング

——コロナ禍は舞台芸術全般に深刻な影を落としま
した。

秋山 発起塾の塾生が一番多いときで280人
くらいいたのですが、コロナのときは半減しま
した。コロナはシニアが命を落とす病気という
意識が定着し、本人は行きたくても家族に止め
られたという人も多かったです。それでも半分
は残りましたし、行けないけれど授業料は払う
という人もいました。

ただ、そもそも運営は公演の入場料でなんと
かやれていたのが、入場者がゼロに近いと1公
演あたり100万円くらい赤字になるんです。
それがずっと続いたので、いよいよこれはダメ
だなという状況にまでなりました。そこで出演
者に15万円というものすごく高い公演費用を負
担してもらったの起死回生公演をしようとい
うことになりました。これでお金が集まらなかつ

最初は「なんちゃって」でいいんです。アー
トなどと難しく考えず、「なんちゃって」で
やってみる。とはいえ、それを可能にする「場」
づくりは必要です。私は「ないものは自分で作
る」という考えでこれまでやってきました。発
起塾はそれを体現したものです。最初に募集を
したときに、たくさんのお問い合わせがあったと
話しましたが、皆さん、「今の自分に、いった
い何ができるのか」と悩んだり、「こんな私に
演劇なんてできるのだろうか」と不安を持ちな
がら門をたたいてこられました。でも実際に始
めると「この年になっても、私でもできるん
だ」という自信につながり、積極的に活動する
ようになっていくんです。発起塾を通して、生
き生きと変化していく人をたくさん見てしまし
た。舞台芸術は、シニアのウェルビーイングの
向上に役立つのももちろん、一見途方もない夢
のようなことも可能にできる素晴らしい力を
持っていると思います。



秋山 ジュン太郎 あきやま、しゅんたろう(か)
特定非営利活動法人発起塾代表。脚本・演出家。
1957年、岡山県生まれ。大阪教育大学を
卒業後、劇作活動、舞台、ミュージカルを中心
にテレビやラジオドラマなどの台本も執筆。手が
けた作品は50を超える。1999年に中高年の
ためのミュージカル劇団「発起塾」を創立し翌年
NPO法人化。演劇を活用した中高年の生きがいづくりの活動は全国
で反響を呼び、大阪、京都、神戸、名古屋に教室を展開。また現在は、
滋賀県長浜市を拠点に「地方演劇と若手育成」にも取り組んでいる。